S. HORIGUCHI, M.D. AND M. YOSHIDA, M.D.: PATHOLOGICAL CHANGES OF TEMPORAL BONE IN TUBAL STENOSIS

耳管狭窄症における側頭骨病変に就て

東京医科歯科大学耳鼻咽喉科教室

教授 堀 口 申 作
ホリグチ シンサク助手 吉 田 正 利
ヨシダ マサトシ

さきに著者等は慢性中耳炎の側頭骨々病変に関する病理組織学的研究を行い、従来余り言及されざりし骨の改構(Umbau)を観察の中心とせる観点に立つて検索を施行したのであるが、今回これと比較検討する意味から耳管狭窄症における側頭骨々病変を病理組織学的に研究する興味を感じて本研究を行った。

文 献 的 考 察

本症はその疾患の性質上、側頭骨を開放して組織学的検索を施行し得る事が少い関係上、本研究に関する過去の文献は意外に多い。

Brock¹⁾ は3例の本症剖検例に就て述べ、中耳粘膜には軽度の肥厚を認めるが、これは炎症に由来するに非ずして粘膜血管の鬱血によるものであり、更に骨新生所見は認められずとした。

Manasse²⁾ は粘膜には変化無く、極めて稀に細胞浸潤が見られるとした。

Krainz³⁾ は2例の鼻咽腔腫瘍に由る耳管狭窄症の剖検所見を発表し、滲出液の存在する部位においては粘膜は著しく浮腫状に肥厚しているが炎症性細胞の浸潤は見ないと述べている。

鰐淵氏⁴⁾ は中耳腔の粘膜は化膿性中耳炎の場合の如き高度の肥厚を呈する事なく、組織学的には多少の円形細胞浸潤並に結締組織の増殖を見るとし、更に欧氏管閉塞の場合に見る中耳腔の滯溜液は陰圧に原因する補空水腫であるとす、症例によつては欧氏管粘膜の分泌物がこれに混じ、あるいは滯溜液の刺激によつてこれに軽度の炎症性変化の加わつたものもあるとしている。

小西氏⁵⁾ は耳管狭窄症の1剖検例において、中耳腔粘膜は乳様突起含気蜂巢を含めて所謂漿液性炎症の組織像を呈し、粘膜の肥厚、血管・リンパ管の拡張、極く少数の円形細胞の浸潤を認めたが、耳小骨並に鼓膜張筋被覆粘膜、耳小骨関節には変化は認められずとし、更に斯る粘膜に覆われた骨質そのものには全く病変を見ずと述べている。

以上の文献を顧みるにその何れも剖検例に就て述べて

いるのであるが、記載せる組織学的所見は何れも中耳粘膜を観察の対象としているのであつて、これ等粘膜に覆われた骨質そのものの組織所見に関しては殆んど言及して居らず 僅かに Brock が骨新生所見は認められずと記し、小西氏が骨質そのものには全く病変を見ずと記載しているのを見るのみである。

著者は慢性中耳炎の骨病理の研究と同様粘膜よりも骨質自身の変化を観察する事に重点を置いて検索を行った。

症 例

患者 25才、女子

初診 昭和31年3月19日

主訴 両側難聴並に耳閉塞感

現病歴 約10年前から両側難聴及び耳閉塞感を訴えており、通気その他の治療を受けていた。左耳のみ当時から耳鳴があつた。7年前に某大学耳鼻科で耳硬化症かメーニール氏病と言われて1ヶ月間入院して通気療法・動脈注射等の治療を受けたが治癒せず本学耳鼻科外来へ紹介された。

化膿性中耳炎の既往症は否定しており、家族歴にも特記す可き事はない。

現症 体格・栄養中等度。鼓膜は両側共中等度に混濁し、且つ内陥しており、肥厚している感じがするが穿孔は認めない。通気度は両側とも不良で耳管狭窄を認めた。聴力はオーディオグラムの如くである。レ線像は写真に見る如く両側共含気蜂巢の發育は多少抑制されている。

昭和31年10月1日入院し、10月13日右側保存的根治手術を施行した。手術所見として蜂巢の發育はやゝ抑制されておるが、炎症巣・真珠腫等は認めなかつた。

乳様洞周辺、これよりやゝ外側皮質に近い部位及び橋部の3ヶ所から骨片を採取し、これを型の如く固定・脱灰・包埋の後、8 μ 前後の切片としHämatoxylin-Eosin 重染色施行。

病理組織学的所見

先ず乳様洞周辺の材料に就いて観るに（第1, 2図）骨血管溝・骨髓腔の不規則な拡大像は余り認められない。Umbauは陽性であつて、吸収像が少いのに対し新生像はところどころに認め得る。即ち第1図において上方、左方及び下方の骨縁に新生骨に由る新しいLamellenが走っているのが見られ、左方及び上方の骨縁に近く造骨細胞が少数ながら存在し、附近には白血球、リンパ球を主とする細胞浸潤が認められる。第2図には剥離せる上皮が見られるが、この上皮はやゝ肥厚しており且つ上皮下には第1図同様細胞浸潤が見られる。骨縁に近く肉芽が有し軽微な骨新生所見が見られる。

乳様洞よりやゝ外側皮質に近い部分の組織像（第3図）に就いて観るに、骨血管溝・骨髓腔のあるものは不規則な型に、あるものは規則的に拡大しており、これ等拡大せる腔には細胞浸潤が認められ、且つ骨質に接する辺縁には骨新生所見が認められる部分がある。即ち不規則に拡大せる腔

の辺縁において一旦過去に吸収を蒙り陥凹せる部分が、その後の新生骨により補充され、この部分のみが旧骨質との内に明確なるKittlinieを以て境されている所見を認め得る。これに反し骨吸収所見は現在活潑に行われつつあるものは見られず、僅に過去の夫が想像される所見を見るのみである。

第4図はBrücke近辺の材料の組織像であるが、先に挙げた組織像とやゝ異り、炎症様所見も殆ど認められず寧ろ正常像に近いものであるが、骨血管溝・骨髓腔の縮少が顯著である。

考 按

以上の如き病理組織学的所見を呈するのであるが、これを慢性中耳炎の側頭骨病変と比較検討すると、慢性中耳炎における側頭骨病変の所見はこれより遙にUmbau

第 I 図

第 2 図

第 3 図

第 4 図

顕著であり炎症性細胞の出現も更に高度のものが多いためであつて、本例における所見はこれに比し軽微であつて、慢性中耳炎と正常のものとの中間に位置するものと言えよう。しかし多少なりとも炎症性細胞の浸潤が認められ、且つ Lamellen 上の動きが見られる以上、全く正常のものとは言ひ難く、この点更に追及検索する必要を認めた。

由来耳管狭窄症、更には慢性中耳カタルにおける滲出液の成因に関し補空水腫説と炎症説との対立が存し、現在猶定説を見ないのであるが、本症がその側頭骨レ線像において陰影を認めあるいは含気蜂巢発育抑制を認める事は山田⁶⁾、藤野⁷⁾氏を始め多くの人の認める所であつて、この点からも本症が炎症乃至は炎症と密接な関係に在る事が考えられる。

更に耳管狭窄症・慢性中耳カタルが単に耳管のみに由来する疾患でない事は側頭骨レ線像上の変化のみでなく、例えば慢性中耳カタルに際し滲出液を吸引排除するも翌日か翌々日には再び元の如く滲出液が貯溜する事に由つても理解される。即ちこれ等滲出液は単に耳管・中耳腔にのみ存するに非ずして後方の含気蜂巢内にも存するものであつて、この意味から本症は耳管のみの疾患に非ずして耳管を含む教室、乳様洞、含気蜂巢全てに亘る疾患であり、この点より側頭骨含気蜂巢に陰影を証明し、又発育抑制が認められるのも当然であつて、この観点からすれば本症は慢性中耳炎と異なる事なく、広い意味での慢性中耳炎の一型と考えられるものと思う。

結 論

25才女子の耳管狭窄症患者に保存的根治手術を施行し、側頭骨の骨病変を組織学的に検索し、次の結論を得た。

骨には変化が見られる。即ち軽度ではあるが Umbau が陽性であり、且つ Lamelle の動きから観て骨新生所見が吸収所見より優つていた。粘膜は軽度に肥厚しており、且つ白血球・リンパ球を含む細胞浸潤が認められ、相当炎症に近いものとの印象を得た。併し未だ検索例が1例のみであり、この点に関し決定的な事は言い難く、更に検索例を追加し、この点追及し度いと思ふ。

文 献

- 1) Brock: Demonstration von Schnitten durch Paukenhöhle und Warzentheil von drei Felsenbeinen mit Tubenabschluss. Verhandl. d. dtsh. otol. Ges. 1914.
- 2) Manasse: Handbuch d. path. Anatomie d. menschl. Ohres. 1917.
- 3) Kratnz, W: Über das Ödem ex vacuo des pneumatischen Endostes. Zeitschr. f. Hals-usw. Heilk. 1925: 11, 478.
- 4) 鰐淵: 歐氏管狭窄症(宿題報告), 日耳鼻, 38巻, 7号.
- 5) 小西: 耳管狭窄症における聴器の病理組織学的研究, 日耳鼻, 56巻, 5号.
- 6) 山田他2名: 分泌性中耳カタルにおける乳様蜂巢のレ線学的観察, 日耳鼻, 56巻, 5号.
- 7) 藤野: 所謂滲出性中耳炎と乳様蜂巢との関係に就て, 日耳鼻, 52巻, 1号.

本論文の要旨は日耳鼻関東地方会第342回例会にて発表した。

(原稿到着＝昭和32.1.24日)

PATHOLOGICAL CHANGES OF TEMPORAL BONE IN TUBAL STENOSIS

By

S. HORIGUCHI AND M. YOSHIDA

*Tokyo Medico-dental University Department of Oto-rhino-laryngology**(Director: Prof. S. Horiguchi)*

Pathological changes of temporal bone in tubal stenosis was investigated. Patient, a female 25 years, complained of bilateral deafness for 10 years. Conservative radical operation was performed on the right ear. The specimen was obtained at the time operation.

Histological findings: (1) inflammatory cells, that is a few leucocytes and lymphocytes, were present in subepithelial tissue. (2) the reconstruction of bone (Umbau) was positive. New bone formation has predominated than resorption. On investigation, emphasis was laid upon the variation of lamelle. (3) epithelium of antrum and pneumatic cells was slightly swollen.